

物語教材「海の命（いのち）」の成立過程および教材の考察 —「一人の海」、絵本『海のいのち』から教材「海の命（いのち）」へ—

An Analysis on the Process of Creating Story-Based Teaching Material for Elementary School Education, As It Relates to the Story “Umi no Inochi” or The Life of the Sea.
— Through the Examination and Comparison of the Story “Umi no Inochi” as a Picture Book Preceding the Current Version and their Original Version
“Hitori no Umi” or The Sea and a Fisherman —

加藤 郁夫*
KATO Ikuo

要 旨

教材「海の命（いのち）」について、もとになった絵本『海のいのち』，それに先行する「一人の海」と比較検討することを通して、どのような変遷の過程をたどってきたかを考察する。そのことで、教材「海の命（いのち）」の教材研究を深め、今後の授業実践への一助とする。「一人の海」は、文章とイラストとの二本立てで、人間と海との対話という側面を強く持っていた。絵本は、「一人の海」が持っていた現代性やリアルさをなくすことで、漁師としての生き方や海とのつきあい方に焦点があてられ、「一人の海」の持っていた復讐譚の側面が弱まり、太一の漁師としての成長の物語となっていった。「一人の海」は、父の仇＝瀬の主を仕留めることに焦点があてられていたが、絵本の太一は与吉爺さの漁師としてのあり方を受け継ぎ、瀬の主に鉾を打たないことで与吉爺さの後継者としての生き方を示すものとなった。教材「海の命（いのち）」は、絵本を元にしてはいるが、光村図書版では「一人の海」を参照したと思われるところがあり、そこに東京書籍版に比して教材として不十分な点がある。

Abstract

The story “Umi no Inochi” is used in elementary school Japanese class. This thesis analyzes by examining and comparing the story “Umi no Inochi” as a picture book preceding the current version and their original version “Hitori no Umi” or The Sea and a Fisherman, how the current version “Umi no Inochi” was adapted from a picture book version “Umi no Inochi” and their original story “Hitori no Umi” for story-based teaching material. The aim of this thesis is to promote the study of teaching materials for this text and facilitate its practical usage in future classes.

The original story “Hitori no Umi” uses both text and illustrations to describe the dialogue between humans and the sea. The main theme of the plot focuses how a young fisherman avenges his father’s death against the king fish living in the sea rapids.

The picture book version “Umi no Inochi” loses a lot of the modernity and reality in the original story and focuses instead on how the fisherman lives as a youth and deals with the sea. The aspect of revenge is lost and the narrative of the main plot revolves around the growth of young Taichi as a fisherman. He does not spear the king and proves himself to be the right successor of his grandfather Yokichi.

The story-based teaching material “Umi no Inochi” is derived from the picture book version; while the text published by Mitsumura adheres more closely to the original story “Hitori no Umi”, which makes the text less appropriate as teaching material.

キーワード：「一人の海」、絵本『海のいのち』，教材「海の命（いのち）」

keywords： “the original story “Hitori no Umi”, the picture book version “Umi no Inochi”, the story “Umi no Inochi”

はじめに

立松和平の「海の命（いのち）」は、1996（平成8）年から使用が始まった光村図書と東京書籍の小学6年の教科書に物語教材として初めて収録された。光村図書では「海の命」、東京書籍では「海のいのち」という表記をとっている。もともとなったのは、1992年にポプラ社から刊行された絵本『海のいのち』である。本稿では教科書教材として示す場合は教材「海の命（いのち）」と表記する。光村図書・東京書籍の個々の教材を示す場合は、それぞれ教材「海の命」、教材「海のいのち」とする。

絵本『海のいのち』には、それに先行する「一人の海」という作品がある。「一人の海」は、1991年8月21日号の「jump novel」vol.1に発表された短編小説である。その後、「海鳴星」、「父の海」と合わせて三編で1993年11月『海鳴星』（集英社）として刊行されている。以下では、「一人の海」の「jump novel」vol.1に発表されたものをjump novel版、『海鳴星』収録のものを海鳴星版と呼ぶ。

教材「海の命（いのち）」と「一人の海」との比較は、すでに昌子佳広（注1）に論究があり、それを受けて中野登志美（注2）も論じている。しかしながら、それらの論究には不十分なところがあると考えている。本稿では、「一人の海」から絵本『海のいのち』へどのような変更があったのか、さらには絵本『海のいのち』から教材「海の命（いのち）」へどのような変更があったのかを考察していく。そのことで、教材「海の命（いのち）」の教材研究を深め、今後の授業実践の一助としたい。

1. 二つの「一人の海」——jump novel版と海鳴星版の比較検討

教材「海の命（いのち）」と関わって「一人の海」について最初に触れたのは昌子である。昌子の論については後で検討するが、そこでは海鳴星版の「一人の海」が対象にされていると思われる。しかし、すでに述べたように最初に発表されたのは「jump novel」誌である。ここでは、二つの「一人の海」を比較検討することからはじめたい。

二者には、文章表現上の差異はほとんど無い。最も異なる点は、絵の扱い・位置である。jump novel版では「立松和平」の名前の横に、「illustration 岸大武郎」とある。作品は、表紙1ページと登場人物紹介の1ページを除くと全27ページにわたっている。そのうち11ページが全面イラストになっている。残り16ページに本文が2段組で記されている。海鳴星版は本文が53ページで、うちイラストだけのページが8ページある。

このように見てくると、jump novel版のイラストの量

が圧倒していることが見てとれる。イラストの有り様も大きく異なっている。海鳴星版のイラストは「みのもけんじ」であり、ここでは本文に対応した、いわゆる挿絵的なイラストになっている。例えば、最初のイラストは父の死の場面である。身体にロープが巻き付いたまま死んでいる男（父）の絵の背後に、顔が黒塗りになっている母と太一が描かれている。その次のイラストは、与吉爺さんの船に乗って二人が漁に出る場面である。

jump novel版と海鳴星版の最も大きな違いは、これらのイラストの違いである。海鳴星版のイラストがあくまでも本文に従属した挿絵であるのに対して、jump novel版のイラストは本文からほとんど独立したものとなっている。

11ページあるイラストのうち、10ページが太一の海に潜っているところが描かれている。残り1ページはイラストの最後に位置するもので、太一が海上に浮上した場面である。潜っているイラストの中には瀬の主（クエ）を描いたものも2ページある。しかし、与吉爺さんが描かれているものは1ページもない。

これらから分かるようにjump novel版のイラストは、本文とほとんど対応していない。それどころか本文とは異なることがそこで語られている。

最初のイラストは、見開きの右側ページに父の死が描かれている文章があり、その左側のページにある。1ページに4つのカットがあり、海に潜る太一が描かれている。そのうちの3つのカットに以下の文が書かれている。

- ・それは太一が潜り漁にも慣れはじめた頃だった——
- ・“縁起をかつぐ”というわけでもないのだろうが…／海底に触れる前に太一は決まって三度こぶしを／強く握りしめる
- ・別に理由はない——／ただ、そうするだけで彼は不思議に心を／おだやかにすることができるのだ
(／は改行を意味する 以下も同様)

この時点では太一は漁師になってはいない。それだけではなく、ここに示した三つのカットに書かれた文は、「一人の海」の本文には存在しない。さらに本文では潜り漁をはじめた太一は「水中眼鏡、ウェットスーツ、腰に巻く鉛のウェイト～」とそのための道具を用意することが語られている。ウェットスーツに関しては、最初に着る時に上手く着ることができなかったことまで語られているのだが、このカットで描かれる太一は水中眼鏡もしていないし、ウェットスーツも身に着けていない。

さらに三番目のイラスト（同じく四つのカットからなる）では次のような文章が登場する。

- ・「太一…太一…／今日も来たのか？」
- ・「？」
- ・「太一…／今日は 私の思い出を見てくれないか…」
- ・「へ オッサンがまた／つまらねえことを。」

このイラストも左ページにあり、右側の本文は与吉爺さんと太一が漁に出る場面である。ここも本文と対応していない。そしてここだけでは少し分かりにくい、太一は海と会話しているのである。八番目のイラストまで、このような海と太一との会話が描かれている。

八番目のイラスト(四つのカットからなる)には、次のような会話が登場する。

- ・「…だがオマエの父は違っていたな／彼は身のほどを知らなかった…／この瀬の主を相手にしてしまったのだ」
- 「なんだと オッサン／もう一ぺん言ってみろ…」
- ・「オッサンはオレ達の事が／何もわかっちゃいねえ!!」
- ・「太一…私がおまえ達の事をわかっているかどうか／それを今 試してみようじゃないか…………… /瀬の主を相手にして／みるがいい!!」

九番目のイラストで瀬の主が描かれ、十番目のイラストで「お父…ここにおられたとですか…／……また…会いにきますたい…」と初めて本文と対応する言葉が描かれる。しかしこのイラストの右側にある文章では、太一はまだ瀬の主と出会ってはいない。

つまり、jump novel版「一人の海」のイラストは本文とは対応しておらず、イラスト独自の展開をしているのである。イラストは太一と海との会話を中心に構成されており、「一人の海」のストーリーとは別に展開している。それが海鳴星版「一人の海」になると、イラストレーターも変わり、前述したように挿絵的なものになっている。

jump novel版「一人の海」は文章とイラストの二本立てで作品が展開されている。そのことによって、太一と海との会話、人間と海との対話という側面が強く出された作品になっている。

2. jump novel版「一人の海」から絵本『海のいのち』への変更点を考える

絵本『海のいのち』(以下、絵本と呼ぶこともある)は、1992年にポプラ社から刊行され、『海鳴星』(集英社)は1993年11月に刊行されている。このことから1991年のjump novel版を受けて、絵本『海のいのち』を創作する過程と「一人の海」が海鳴星版にまとめられる過程とは並行してあったのではないかと推測される。

ただし、前述したようにjump novel版と海鳴星版の「一人の海」にはイラストを除けばほとんど差異が無いことから考えると、海鳴星版は絵本『海のいのち』の創作過程に入る前にはある程度できていたと考えるか、立松による手入れはほとんどなされなかったのではないだろうか。海鳴星版で何故イラストが変更されたのかも明らかではないが、1993年に『海鳴星』が出版されていることから考えるならば、作者・立松はイラストの変更を了解していたと考えられる。そうでない限り『海鳴星』は出されなかったはずである。jump novel版イラストに示された太一と海との会話がなくても、作品として自立し得るという認識が立松の中にあったとみなくてはならない。

ここでは、jump novel版「一人の海」から絵本『海のいのち』に至る中でどのような変更があったのかを検討する。

はじめに、昌子佳宏の論(注3)から見ていく。昌子は、「まず『一人の海』という作品が成り、その後それを改稿して、エッセンスと一部の表現を取り出して、絵本『海のいのち』が制作されたのではないかと考え、「一人の海」では「登場人物たちの発話はすべて九州地方におけるものと目される方言である」ことを指摘した上で、両者の違いを大きく四点述べている。

一つ目は、絵本に太一の母の登場が少ないことを指摘し、「絵本版(教材版)はその分、[母]の登場といい発言といい、その展開がいくぶん唐突な印象を受け、[母]の恐れ・心配の内実が今ひとつ読み込めない」とする。

二つ目は、「一人の海」では「[瀬の主]を仕留める、そのような願望が実現したところで、本質的に「漁師」としてのステータスを高めることには必ずしもならないことを、[与吉爺さ]の言動から[太一]は知らず知らずのうちに学んでいったと読むことができるが、絵本ではそのような場面や叙述が削除され「[与吉爺さ]との出会いが[太一]に何をもたらしたのかを読みとることは極めて困難である」とする。

三つ目は、「おいもとめているうちに、不意に夢は実現するものだ」の[夢]に関わって絵本では夢について語られるのはここだけであることを指摘し、「半ば取り憑かれたように巨大なクエをさがし続ける[太一]の姿が描かれてこそ、[おいもとめているうちに]という表現は生きてくるのではないかとする。

四つ目は、瀬の主に鉾を打たなかったことに関わり、「[太一]が[瀬の主]と目されるクエに鉾を打たなかった理由については、「千びきに一びき」ということばをめぐる理解を前提としたとき「千びきに一びき」をめぐる理解を深める契機がほとんど失われている『海の命(いのち)』においては、非常に困難になってい

る」とする。

確かに、昌子の述べるように絵本『海のいのち』には分かりにくいところが存在する。母の描き方や夢の記述などの昌子の指摘には共感するところがある。しかしその一方で、昌子は「『海の命（いのち）』を「一人の海」によって理解しようとする」ことに「矛盾を抱えてしまっている」とも述べている。昌子の述べるように、『海のいのち』の欠落を「一人の海」で補おうとする読みは、作品読解の上からいっても生産的ではない。あくまでも別の作品として理解されなくてはならない。私がここで両者の比較を試みるのは、「一人の海」を通して教材「海の命（いのち）」を理解するためではなく、絵本『海のいのち』と「一人の海」の違いから絵本『海のいのち』、さらには教材「海の命（いのち）」の独自性を明らかにするところにある。

以下に、絵本での変更点を見ていきながらそのことを明らかにしていく。その中で、昌子の指摘についても検討を加えていく。

一つ目は、絵本が漁師に関わる記述での現代性やリアルさを無くしたことである。「一人の海」には次のような与吉爺さんの船に関わる記述がある（注4）。

レーダーや無線やソナーが装置されていることは外から見ただけでもアンテナが立っているのだからわかるのだが、肝心の電源がはいっていないので表示の画面は暗い。魚群探知機も作動していない。船自体は決して新しくはないのだが、与吉爺さんは他の船が装備しているような機械をすべてつけていた。

また、太一が潜水漁をはじめるときには次のような記述がある。

潜水漁師の道具はこれ以上簡単なものはないというほど簡単だった。（中略）水中眼鏡、ウェットスーツ、腰に巻く鉛のウェイト、足びれ、手鉤、鉗、それに獲物をいれる網の袋だけだ。

海鳴星版でも水中眼鏡をした太一の絵が描かれている。さらには、太一たちの暮らしぶりも次のように語られている。

クエ獲り名人と村人に讃えられる父を持ちながら、太一の家は貧乏だった。父はタイにもブリにもカンパチにも目をくれず、ましてアワビやサザエやウニなど問題にもせず、クエしか獲ろうとしなかったからだ。

偏屈太助が父の通り名であった。それでも近所の人が母のところにお魚をとどけてくれるので、一家が飢えることはなかった。父がクエ一筋に偏屈だった分、母がまわりの人

に気を遣い愛想を振りまいていた。母は網元に雇われて網はずしの作業などにでかけ、一家を支えていた。

これらの記述は絵本『海のいのち』には全く引き継がれていない。伊勢英子の絵では、海に潜る太一は水中眼鏡すら着けていない。リアルな記述をなくしたことで、漁師としての生き方、海とのつきあい方に焦点をあてて描かれることになった。これは、昌子が「エッセンス……を取り出して」と言っているところと重なるといえよう。

「一人の海」は「俺は漁師になるばい。お父といっしょに海ばでるとよ」と会話は九州地方の方言で語られ、次のような記述もある。

漁師を廃業して街に流れていく人も多かった。彼らはトラックの運転手になったり、町工場の工員になったりした。中学校の同級生のうちで、村で漁師になったのは太一のほかには水産高校を卒業してきた二人だけだったのだ。

それに対して、絵本で時を示すのは、唯一以下の箇所だけである。

中学校を卒業する年の夏、太一は与吉爺さんに弟子にしてくれるように頼みに行った。

時や場所が明確ではなくなった分、リアリティは弱くなるが、逆に日本のどこにでも（クエが獲れるという条件はあるが）あてはまるという一般性を獲得する。

「一人の海」の与吉爺さんは、鯛付け漁という「毎日餌をまきにいつて瀬の決まった部分に魚を鯛、必要な分だけ釣ってくる」漁法を行っている。それに対して絵本『海のいのち』の与吉爺さんの漁は、一本釣りとしか説明されない。漁法も明確には語られない。つまり、漁師としての生き方、海とのつきあい方に焦点化し、それをより抽象化・象徴化して描いているのである。

二つ目は、そのことと関わって絵本では太一の描かれ方が変化したといえる。「一人の海」は、太一が父の仇をうつことを中心にストーリーが展開していた。それに対し、絵本では復讐譚の要素が非常に弱くなり、太一の成長の物語となっている。

「一人の海」の太一が漁師になるころでは、次のように語られる。

…太一は、中学校をでるとすぐ親戚の漁師を親方として弟子入りした。親方は潜水漁師ではなかった。（中略）船や網や竿をひととおり使えるようになると、潜水漁師の弟子になるつもりだった。

そして、この後に太一の夢が「父を殺したという瀬の主のクエを仕留めること」だと語られる。太一は、父と同じ潜り漁師になり、「父を殺した」瀬の主を倒すことをはじめからの目標にしている。したがって、与吉爺さに弟子入りしたのは、太助瀬（太一の父が死んだことからこう名付けられた）をよく知っているということというのが最大の理由となる。

さらに、与吉爺さんの死後には次のように語られる。

一番欲しいのに手に入らないのは、潜り漁の師匠である。

「一人の海」の太一にとって、与吉爺さんは一人前の潜り漁師になるための通過点の一つでしかない。与吉爺さんの死後も、太一が潜り漁師を目指していることに変わりはない。さらに「一人の海」の太一は、「潜り漁の師匠」は得られないまま、潜る練習を始めて行く。そして、太助瀬に潜ってウニやアワビを獲り、クエも獲っている。そして次のように語られる。

あれからまた五十キロのクエを三匹獲った。サザエやアワビやウニならば、もう数えるのが不可能なほどに海からあげた。それでも太一は虚しいのだった。

「虚しい」のは、瀬の主と出会っていないからである。太一は、瀬の主を求めて太助瀬に潜るのであり、その目標は瀬の主を倒すことにある。このように「一人の海」は、太一の復讐譚を主筋として展開している。それゆえ「父を殺したという瀬の主」「父を殺したクエ」「父を殺した瀬の主」といった表現が繰り返し登場している。

一方、絵本『海のいのち』では次のように語られる。

中学校を卒業する年の夏、太一は与吉爺さんに弟子にしてくれるようたのみにいった。与吉爺さんは、太一の父が死んだ瀬に、毎日一本釣りにいっている漁師だった。

絵本では、太一が与吉爺さんを師として選んだ理由は明確には示されていない。「与吉爺さんは、太一の父が死んだ瀬に、毎日一本釣りにいっている漁師だった。」という一文はあるが、それが弟子入りの最大の理由であったかどうかは明確ではない。ただ、太一が自ら進んで与吉爺さんに弟子入りし、それも中学卒業の半年前であることから、与吉爺さんには太一が師として選ぶだけのものがあつた、それだけの技量を持った漁師であることが印象づけられる。また、「中学校を卒業する年の夏」という記述から、太一は卒業の半年も前に自らの進路を決め、そのための行動を起こしていることが分かる。漁師になることを主体的に選び取った太一の姿が読みとれる。そ

して、与吉爺さんを師匠に選んだことから与吉爺さんの存在の大きさもうかがえる。

なおかつ絵本の与吉爺さんは、太一のただ一人の師匠となる。それゆえ「与吉爺さん、心から感謝しております。おかげさまでぼくも海で生きられます。」という言葉は、太一の漁師としての自立をはっきりと示すものとなる。そして太一はその後も、与吉爺さんに教わった一本釣りを続ける。

絵本の太一は、父の死んだ瀬にもぐりながらも、何も獲っていない。与吉爺さんの一本釣りで二十四釣り、それだけで生計を立てている。それで生活できるのかといえ、やや現実的では無いかもかもしれない。しかし、すでに見たように「一人の海」の現実性を捨てたところに絵本『海のいのち』は成立しているのである。与吉爺さんの一本釣りに漁師としての生き方を見だし、そこに生きるのが絵本の太一なのである。父のような潜り漁師を、絵本の太一は目指していないのである。

加えて、絵本には「父を殺したという瀬の主」といった表現は登場しない。唯一、瀬の主との対峙の場面で「父をやぶった瀬の主」という表現が出ているだけである。父の仇を討つという要素が、絵本でははるか後景に下がっていることを改めて確認しておきたい。

絵本『海のいのち』では、太一は与吉爺さんの死後も一本釣りを続ける。それゆえ、太一は与吉爺さんの後継者として描かれる。父の死んだ瀬に潜りながらも、そこで潜り漁をしていないことは、太一が潜り漁師として生きようとしていないことを示す。それは、父の生き方（潜り漁師としての生き方）と、与吉爺さんの生き方（一本釣り漁師としての生き方）とを対比して描くことになる。「一人の海」では、与吉爺さんの漁を受け継ぎながら、太一は潜り漁師を目指そうとする。結果、飼い付け漁と潜り漁とが対比的に描かれることはない。

昌子は「[与吉じいさ]との出会いが[太一]に何をもちたのかを読みとることは極めて困難である」（注5）と述べていたが、むしろ「一人の海」の太一の方が、海は「細く長く付き合わねばいかん」とは口にするが、飼い付け漁と潜り漁の二つの漁をすることで、与吉爺さんから何を受け継いだのかが見えにくい。

「一人の海」は、与吉爺さんと父太助の潜り漁を対立させることなく、そのどちらも海と共に生きていく生き方として描いているのである。それに対して、絵本『海のいのち』は、与吉爺さんの「千匹に一匹でいいんだ」という漁のあり方と父の潜り漁を対比的に描く。そのことは結果として、「一人の海」での太一と瀬の主との対峙における緊張感を緩めてしまう。他のクエは獲っているにもかかわらず、なぜ瀬の主だけには鉾を打たないのか、そこに合理的な理由を見出すことは難しくなる。

三つ目は、太一の父の名前「太助」の消滅である。

「一人の海」では太一の父は「太助」という名前を持ち、父が死んだ瀬は「太助瀬」と呼ばれるようになる。絵本の父は、次のように語られている。

父はもぐり漁師だった。潮の流れがはやくて、だれにももぐれない瀬に、たったひとりでもぐっては、岩陰にひそむクエをついてきた。二メートルもある大物をしめても、父は自慢することもなくいうのだった。

「海のめぐみだからなあ」

不漁の日が十日間つづいても、父はなにもかわらなかった。

分量が少なくなるからといっても、名前を出すくらいはさほど難しいことではない。「一人の海」の太助は、クエ専門の潜り漁師であり、他の魚には見向きもしない。

絵本でも潜り漁師と語られるが、クエ専門とまでは書かれていない。名前が示されないのだから、死んだ瀬に名前を付けられることもない。父の名前の消滅は、それだけ父の存在が物語の後景に移ったことを意味する。

「一人の海」で名前を持つのは、太一と太助と与吉爺さの三人であった。その内の父の名前が無くなることで、絵本では名前を持つのは太一と与吉爺さの二人となる。結果的に与吉爺さの存在が大きくなる。すでに見てきたように、太一は与吉爺さの後継者として生きようとする。太一が与吉爺さの生き方を選び取ることは、「千匹に一匹」という考えを引き継ぐことでもある。その教えは、瀬の主との対峙で銚を打たないことを選び取らせていくものとなる。なぜなら、太一はこの日も二十匹の魚を獲っているはずであり、それ以上の魚を獲ることは、与吉爺さの教えを裏切ることにしかならないからである。

四つ目に、瀬の主を前にしての太一の葛藤の描き方である。少し長くなるが、「一人の海」における該当箇所を引用する。

太一は鼻先に向かって銚を突き出すのだが、クエは動こうとしない。かつて自分が殺した漁師の息子にその身を捧げようともしているのかもしれない。魚の目に見られているうちに、太一は自分が殺意もなく静かな気持ちでいることに気づいた。魚は太一の心の底までのぞいているかのようである。殺意ははじめからなかったのか、それとも魚の視線によって溶かされてしまったのか、すでに太一はわからなかった(①)。そうしたまま時間が過ぎた。太一は永遠にここにいられるような気さえてきた。しかし、息が苦しくなってまた浮かんでいく。

もう一度戻ってきても、瀬の主はまったく動こうとせ

ずに太一を見ていた。穏やかな目だった。もし言葉が交わせるのなら、太一はこの魚に問うてみたいことがたくさんある。クエは瞳を固定して太一を見ていた。あまりの無防備さに、この大魚は自分に殺されたがっているのだと太一は思ったほどだった。太一はこれまで数えるのも不可能なほどの数の魚を殺してきたのだが、こんな感情になったのははじめてだ。この魚を獲らなければ本当の一人前の漁師にはなれないのだと、太一は泣きそうな気分になりながら思う。激情が去ると、静かな気持ちになった(②)。

水の中で太一はふっと微笑み、口から銀のあぶくをだした。銚の刃先を足のほうにどけ、魚に向かってもう一度笑顔をつくった。

「お父、ここにおられたとですか。また会いにきますばい」

こう思うことによって、太一は瀬の主を殺さないですんだのだ。大きなクエはこの海の命だと思えた。

*傍線および①②は著者が付したものの

ここで注意したいのは、銚の刃先をどける直前に「激情が去ると、静かな気持ちになった。」の一文があることである。さらにその前には「太一は自分が殺意もなく静かな気持ちでいることに……」とあり、太一が瀬の主を銚を打ち込む前の感情の高ぶりは弱い。瀬の主を銚を打たないことへの伏線が①②と張られているため、逆に太一の中における銚を打つか打たないかの葛藤は弱くなる。

言い換えれば、①②の伏線がなければ、銚を打たないことを説得力を持って語る事ができないのである。ここまで父を殺した瀬の主を倒すために太一は生きてきたのである。すでに四匹のクエを獲ってもいる。その太一が、瀬の主だけに銚を打ち込むことをしない根本的な理由は何なのか、その理由付けが「一人の海」には弱いのである。復讐譚をメインのストーリーとして語ってきただけに、最後でそれを逆転させるためには、それなりの仕掛けが必要であるにも関わらず、それが書き込めていないのである。

これに対して絵本『海のいのち』は次のように語る。

もう一度もどってきても、瀬の主はまったく動こうとせず太一を見ていた。おだやかな目だった。この大魚は自分に殺されたがっているのだと太一は思ったほどだった。これまで数かぎりなく魚を殺してきたのだが、こんな感情になったのははじめてだ。この魚をとらなければ、ほんとうの一人前の漁師にはなれないのだと、太一はなきそうになりながら思う。

水の中で太一はふっとほほえみ、口から銀のあぶくを

だした。銚の刃さきを足のほうにだけ、クエにむかってもう一度笑顔をつくった。

「お父、ここにおられたのですか。またあいにきますから」

こう思うことによって、太一は瀬の主を殺さないで済んだのだ。大魚はこの海のいのちだと思えた。

*行空きでページが変わっている

「一人の海」では、銚をどける前にすでに「静かな気持ち」になっていたのが、絵本では、太一の銚を打つか打たないかの葛藤がぎりぎりまで語られる。

瀬の主との対峙で、途中2回太一は息継ぎで浮かび上がるのだが、1回目の息継ぎをして戻ってきたときに、「一人の海」では、太一の中の殺意は消えている。しかし絵本にその表現はない。

クエに銚を打つかどうかという葛藤は「一人の海」の方が明らかに弱い。結果として、クエに対して「お父、ここにおられたとですか。また会いにきますばい」というクライマックスの言葉の衝撃も弱いものとなっている。

絵本では、太一の瀬の主に対する葛藤(銚を打つべきなのか、打たないですませるか)をぎりぎりまで高めた上で転換させている。

クライマックスの場面だけを見るならば、「一人の海」と絵本の文字量にはそれほど差はない。絵本はそれを4つの場面に分けて描いている。うち3場面が、太一と瀬の主との対峙である。そこで太一の瀬の主に対する葛藤をぎりぎりまで描いて緊張感を高め、4つ目の場面で銚を打たないという決断を示すようになっている。そうすることで緊張感が高まると共に、なぜ太一は銚を打たなかったかを読者に考えさせることにもなる。

3. 絵本『海のいのち』の検討

絵本は、全16の場面から成り立っている。うち15場面は、見開き2ページが一場面であり、見開きの右側の端に3~5行で文章が書かれている。文字があるのはページの3分の1くらいのスペースである。つまり、見開き2ページの1ページと3分の2に絵が描かれている。16場面だけは、1ページで花の絵が描かれて、その上に文章が記されており、他の場面との差異が明らかである。以下に場面を示す。

- 1 場面 (父もその父も、～ばからなかった。)
 - 太一の紹介
- 2 場面 (父はもぐり漁師～なにもかわらなかった。)
 - 父の紹介
- 3 場面 (ある日父は～方法はなかったのだった。)
 - 父の死
- 4 場面 (中学校を卒業する～弟子になったのだ。)

与吉爺さへの弟子入り

5 場面 (与吉爺さは～船全体を共鳴させている。)

与吉爺さの漁1

6 場面 (太一は、～ブリになったりした。)

与吉爺さの漁2

7 場面 (弟子になって～ここはおまえの海だ。)

「おまえは村一番の漁師だ」

8 場面 (船にのらなくなった～帰っていったのだ。)

与吉爺さの死

9 場面 (ある日、～せおおうとしていたのである。)

母の悲しみ

10 場面 (いつもの一本釣りで～やって来たのだ。)

父の海にもぐる

11 場面 (太一が瀬に～青い宝石の目を見た。)

もぐって一年が経過

12 場面 (海底の砂に～こえているだろう。)

瀬の主との対面1

13 場面 (興奮しているながら～またうかんでいく。)

瀬の主との対面2

14 場面 (もう一度もどって～なりながら思う。)

太一の葛藤

15 場面 (水の中で太一は～海のいのちだと思えた。)

銚を打たない決断

16 場面 (やがて、～だれにもはなさなかった。)

その後

絵本に関わって、二つのことを述べる。一つは、以下に示す11場面に関わる問題である。

太一が瀬にもぐりつづけて、ほぼ一年がすぎた。父を最後にもぐり漁師がいなくなったので、アワビもサザエもウニもたくさんいた。はげしい潮の流れに守られるようにして生きている、二十キロぐらいのクエも見かけた。だが、太一は興味をもてなかった。

おいもとめているうちに、不意に夢は実現するものだ。

太一は海草のゆれる穴の奥に、青い宝石の目を見た。

「一人の海」も行アキが10カ所あり、11場面の構成になっている(詳細は後述)。太一が瀬の主と出会う場面の始まりは以下のようにになっている。

追い求めているうちに、いきなり夢は実現するものだ。最初のクエを仕留めてからちょうど一ヵ月たち、潜るにもそろそろ水も冷たくなってきた頃であった。

絵本では「おいもとめているうちに……」の前に行アキはなく、その前と一緒に一つの場面を構成している。それに対して「一人の海」は、「追い求めているうちに、いきなり夢は実現するものだ。」の前に行アキが存

在し、場面転換している。

すでに述べたように「一人の海」の太一は太助瀬に潜り、ウニやアワビやクエを獲っている。太助瀬に潜り始めたころは、ウニやアワビは獲っても、クエは獲っていなかった。「これまでにクエの姿を岩陰に何度か見かけはした。しかし、どれも三十キロに満たない小さな魚体だった。そのどれも太一は見逃してきたのである。」と語られている。その太一がクエを獲るきっかけは父の次のような会話である。

「まだまだ一人前じゃなか。クエは一匹も獲っとらん」
「それなら獲らしてあげようかいねえ。銚ば持って挑びまんね」

もちろん、現実の父との会話ではない。太助瀬にやっ来て来た太一の想像の中での会話である。この会話からも太一が父をおいかけて潜り漁師を目指していることが明らかである。

「一人の海」では、太一が中学を出て漁師に弟子入りしたところで次のように語られる。

太一は秘かな夢を育てていた。最初は妄想に近くて形もなき夢であったが、太一が一人前の漁師として大きくなっていくにつれ、夢も具体的になってきた。父を殺したという瀬の主のクエを仕留めることだ。

この夢は、繰り返し語られている。与吉爺さに弟子入りのところでは次のように語られる。

太一はあのクエを仕留めた時が、即ち自分が漁師として一人前になる時なのだと思いを定めていた。その時こそ、父のようにこの海で生きることができるのだ。頑なにそう思い込むほどに、太一は父を殺したクエのことを幼い頃より考えつづけてきたのである。

したがって、「一人の海」の「追い求めているうちに、いきなり夢は実現するものだ。」が何を指しているかは明白である。加えて「父を殺したクエ」という表現から、瀬の主は太一にとって父の仇なのである。

それに対して絵本では、昌子も指摘するように「夢」がこれ以前に語られていない。「父を殺した」といった表現も、父の仇をうつといった表現もない。あるのは8場面の以下のところである。

ある日、母はこんなふうというのだった。
「おまえが、お父の死んだ瀬にもぐると、いついっだすかと思うと、わたしはおそろしくて夜もねむれないよ。おまえの心の中が見えるようで」

太一は、嵐さえもはねかえす屈強な若者になっていたのだ。太一は、そのたくましい背中に、母の悲しみさえも、せおおうとしていたのである。

絵本『海のいのち』では、ここで初めて太一が父の死んだ瀬に潜るという話題が登場する。この母の言葉から、読者も太一が瀬の主を狙っているのではないかという予想を持つことになる。この予想につなげて太一が追い求めた夢を想像するなら、瀬の主との対決を読むことはそれほど難しくはないだろう。その意味で昌子の批判は分からないことはないが、「夢」の登場は唐突でありながらも与吉爺さんの死後、太一が瀬の主を求めているのではないかという事件の新たな展開を予告するものとして読むことは十分に可能であろう。絵本の母は、父の死んだ瀬に太一が潜ることへの恐れや心配を示すところに意味を持っている。その登場は確かに唐突ではあるが、私は分かりにくいとは思わない。

ただし、絵本では太一が瀬の主との対決を求めているのではないかということ自明のこととして読み進めるのではなく、「どうもそうらしい」といった予想の中で読むしかない。

それに対して「一人の海」では、太一の夢はすでに語られており、「追い求めているうちに、いきなり夢は実現するものだ。」で何が語られようとするかは、明白である。したがって、「追い求めているうちに……」の前に行アキを置くことで、ここから瀬の主との対決の場面が始まるという転換がはっきりと示される。それに対して、絵本では夢が明確に語られていないだけに、ここでの場面転換は唐突なものとならざるをえない。瀬に潜り続けて一年が経過したことから語ることで、一年という時間の経過を先に示し、何かが起こるのではないかという予感を読者に持たせる。さらには、アワビやサザエやウニにも、二十キロぐらいのクエにも興味を持たないことから、太一が瀬の主を求めて潜っていることが読者に暗示される。絵本『海のいのち』の場面転換には、明確な理由を読みとることができる。

また、夢の内実を語っていない絵本では、「夢は実現するものだ」の「夢」の内実はそれ以降の展開の中で理解をしていくしかない。しかし「一人の海」は、夢の内実を「父を殺したという瀬の主のクエを仕留めること」と示している。とすれば「追い求めているうちに、いきなり夢は実現するものだ。」という一文は、その後の展開から考えれば、矛盾した一文となる。太一は瀬の主であるクエに銚を打たなかったのであり、その意味では夢は実現しなかったのだから。

二つ目は、絵本『海のいのち』は4～8場面の五つの場面が与吉爺さんの関わりを、11～15場面の五つの場面で瀬の主との対峙を描いている。与吉爺さんの関わり

と瀬の主との対峙の二つを主な事件として構成されていることが分かる。それに対して、「一人の海」はどうか。「一人の海」全11場面の構成を以下に示す。

- 1 場面 太一家の紹介
- 2 場面 父・太助の死
- 3 場面 瀬の主を仕留めるために漁師になる
- 4 場面 与吉爺さの弟子になる
- 5 場面 弟子として一年が経過
- 6 場面 与吉爺さの死
- 7 場面 潜り漁師をめざす
- 8 場面 太助瀬にもぐる
- 9 場面 潜り漁師としての太一
- 10 場面 瀬の主との出会い
- 11 場面 その後

比較してみると、「一人の海」は、父の仇を討つ（瀬の主を仕留める）ことに焦点があてられていることがはっきりする。2 場面で父が死に、3 場面でその仇を討つことを夢に太一は漁師となる。4～9 場面は10 場面の瀬の主との対峙に向かって描かれている。与吉爺さへの弟子入りも、与吉爺さの死後も、太一は潜り漁師として瀬の主を求め続け、最後に瀬の主と出会う。結果的に、太一が与吉爺さの漁法を受け継いでいる意味は薄らいでしまう。

絵本『海のいのち』は、与吉爺さの死後、太一は海に潜りはじめるが潜り漁師としての仕事はしていない。海に潜っている時も太一の漁は、与吉爺さに教わった一本釣りである。そこに与吉爺さから受け継いだものを守っていくと太一の姿勢が読みとれる。それゆえ、瀬の主との対峙は、太一のこれからの生き方を選択する意味をもって来る。瀬の主に鉾を打つことは、潜り漁師としての生き方を選ぶことであり、打たないことは与吉爺さの生き方を続けていくことになる。「一人の海」は両者の対比が明確でないだけに、太一がなぜ瀬の主を打たなかったのか、その理由が明確にはなっていない。瀬の主と対峙する前の一ヶ月のうちに太一は四匹のクエを仕留めている。他のクエは獲っているにもかかわらず、なぜ瀬の主だけには鉾を打たないのか。その理由が見えにくい。それに対して、絵本『海のいのち』の太一は、鉾を打たないことで与吉爺さの生き方を選択したことが明らかになる。そして、太一がこれからも与吉爺さの生き方を受け継いでいくことが示されるのである。

4. 教材「海の命 (いのち)」の検討

1996 (平成 8) 年に光村図書と東京書籍の小学 6 年の教科書に物語教材として収録された。光村図書では「海の命」として、6 年下に収録された。東京書籍は、「海のいのち」とし、6 年上の教科書に収録された。す

で指摘されていることだが、教科書収録において光村図書と東京書籍では決定的に異なることが二点あった。

一つは、行空きである。光村図書では四カ所の行空きが存在し、全体が六つの場面に分けられている(注 6)。東京書籍は、最後のところ(やがて太一は村のむすめ～)だけに行空きがあり、他では行空きを設定していない。

二つ目が、光村図書で与吉じいさの死後の母との関わりにおいて新たに一文が追加されたことである。(注 7)

太一は、あらしさえもはね返す屈強な若者になっていたのだ。太一は、そのたくましい背中に、母の悲しみさえも背負おうとしていたのである。

母が毎日見ている海は、いつしか太一にとっては自由な世界になっていた。

傍線部がそれである。この一文の挿入について渋谷孝は 2001 年の段階で次のように述べている。(注 8)

これは、今までに類を見ない事例である。編集部がこのような読むべきであるとして加えた注記ではない。本文に対する一つの解釈が「本文」として位置づけられたのである。解釈がすっきりしてよいと見るか、窮屈な限定を加えるべきではないと見るか、本文づくりの新しいケース(事例)なので事実だけを紹介して、後考に待つ。

また昌子は光村図書の教師用指導書に掲載されている「作者の言葉・海が育ててくれる」で作者の立松が絵本からの教材化にあたって「原典にない一行空きを加えたり、若干の言葉を補ったりした」と述べていることに触れ、次のように述べている。(注 9)

私は、絵本版『海のいのち』は、絵そのものが語っている部分・要素が大きい作品であると見ている。その最たるものが A の絵であり、[与吉じいさ]も亡くなり、その教えを受けて身も心もたくましくなった[太一]がついに独り立ちする姿を、この一枚の絵が語っているのではないかと思う。そして、教科書編集の都合上割愛せざるを得なかったその絵を補うために、問題の一文が加えられたのではないかというのが私の推測である。

(著者注 A の絵とは、絵本『海のいのち』9 場面の太一が海に飛び込むさまを描いた絵をいう。)

この後に続けて昌子が「東書版にはなぜその一文は加えられなかったかという問題が残る」と述べているように、光村図書版にだけ付け加えられたという事実は、作者・立松の意向とだけ考えるには、いささか無理がある

ように思われる。

光村図書の指導書には、この一文に関わって次のような記述がある。

母にとっては悲しみの世界が、太一にとっては「自由な世界」であるという対比が、両者の心情を際立たせている。

中野登志美は、次のように述べる。(注10)

母親にとっては夫が絶命した瀬は禁忌の場所であるのだが、太一にとっては禁忌の場所ではなく「自由な世界」であることを読者に示すことになる。父親が絶命した瀬は、太一にとって「自由な世界になっ」(ママ)ていることを表わす一文は、父親を殺したクエを仕留めたいと敵討ちに執着して捕らわれていた、太一のクエに対する復讐心の解放を暗示している。したがって、「太一は、そのたくましい背中に、母の悲しみさえも背負おうとしていた」の一文は、太一がクエを殺さないことを選択するクライマックスの場面の伏線となっているのである。

*著者注 「太一は、そのたくましい背中に、～」の引用箇所は「母が毎日見ている海は、～」の間違いではないかと考えるが、どうだろうか？

中野は、「夫が絶命した瀬」と「瀬」を問題にしているが、ここでは「母が毎日見ている海」とあるように、「海」として問題にされなくてはならない。母は、太一が毎日漁のために海に出ることで、いつかは父の死んだ瀬にもぐる(父の仇を討とうとする)ことへの不安をもつのである。それに対して、「母が毎日見ている海は、いつしか太一にとっては自由な世界になっていた。」の一文は、太一が一人前の漁師として独り立ちしたことを表わす。なぜそのような一文がここに必要だったのだろうか。

この一文を「一人の海」の叙述と対応させてみたときに、その理由が見えてくる。「一人の海」は、与吉爺さんの死から瀬の主との対峙までに、潜り漁師の師を求めることや潜り漁のための道具をそろえたり、先輩の潜り漁師に潜り方を聞いたり潜り漁師として経験を重ねていくことが描かれている。つまり「一人の海」の太一は、与吉爺さんの死によっては、独り立ちできていないのである。

しかし絵本『海のいのち』の太一は、与吉爺さんに師事することで一人前の漁師になったのである。与吉爺さんの死は、太一が一人前の漁師として独り立ちすることを意味する。それは、与吉爺さんの死後の太一の言葉にも示されている。

「一人の海」と比較することで、一文追加の意味が見えてくる。「一人の海」を元に考えると、太一が一人前の漁師になったことを改めて語ることが必要であるかのように思ってしまうのである。しかし、すでにみたように絵本『海のいのち』では、与吉爺さんの死=太一の独り立ちと描かれている。したがって、一文の追加は蛇足となる。追加することで、同じことが二回語られることとなり、読みを混乱させるものとなってしまった。

また、中野の「太一のクエに対する復讐心の解放を暗示」も、ここまで太一のクエに対する復讐心が語られていないのであり、有効な読みとはなり得ない。すでに述べたように絵本には復讐譚の要素が「一人の海」に比してはるかに薄いのである。

もう一つ、光村図書の教材「海の命」における「追い求めている～」での行空きについて検討しておく。結論から言えば、この箇所に行空きを設けるべきではなかったと考える。もともと、夢が語られていないのだから、いきなり夢といわれても、読者は途惑ってしまうし、わかりにくい。ただ、その分意外性があり、「太一が追い求めている夢とは何だろう？」という疑問とともに、読者を引きつけるものとなっているといえなくもない。しかし「追い求めている～」からの行空きは、その前の「太一が瀬にもぐり続けて、ほぼ一年が過ぎた。～」の叙述とのつながりを切断してしまった。

絵本の流れからみれば、11場面のように「太一が瀬にもぐりつづけて、ほぼ一年がすぎた。」の前に行空きを設定した方が自然であった。そうすることで、一年の時間の経過を意識するとともに、新たな展開への予感を与え、「夢」という唐突な表現から、瀬の主との出会いにつながっていく自然な展開となる。「追い求めているうちに、～」の前の行空きは、その前の時間と切り離すことになり、場面構成としても分かりにくいものとなってしまったといえる。

作者・立松は、光村図書の指導書で、絵本『海のいのち』と同じ場面数の絵を取り上げることが難しいという理由を挙げ、次のように述べている。

そこで、文章を読むだけでも物語の時間経過が読者に伝わるよう、原典にない一行空きを加えたり、若干の言葉補ったりした。

しかしすでに見たように、「追い求めている～」での行空きは、逆に分かりにくいものになっており、一文の追加が「物語の時間経過」を伝わりやすくもしていない。

ちなみに、渋谷孝は以下の六つの場面に分けている。(注11)

- I 父もその父も、
- II 中学校を卒業する年の夏
- III 弟子になって何年も
- IV ある日、母はこんなふうに
- V 太一が瀬にもぐり続けて、
- VI やがて、太一は村のむすめと

渋谷はこの時点で光村図書版にも触れているので、この行空きも見てはいるはずだが、光村図書版の行空きには触れず、V場面を「太一が瀬にもぐり続けて～」からとしている。また「児童に調べさせても大部分の者は、場面分けの作業にそんなに困惑しないであろう」と述べている。私も渋谷の場面分けに賛成である。

「追い求めている～」の前で行空きを設けていたのは「一人の海」であった。そして与吉爺さんの死後に一人前の潜り漁師になるための過程を語っていたのも「一人の海」であった。絵本からの教材化にあたって、「一人の海」を参照しようとしたことで、結果的にわかりにくい行空きと不可解な一文の追加につながったのではないだろうか。

光村図書版での他の四カ所の行空きは、絵本における場面転換とも一致している。行空きを設けることは、子どもたちの物語読解を助けるので、設けたこと自体は賛成であるが、光村図書版の「追い求めている～」における行空きと一文の追加については、問題があることを指摘しておきたい。

おわりに

「一人の海」から絵本へ、そして教材「海の命（いのち）」への変遷の過程を見てきた。そこで明らかになったのは、「一人の海」は太一の復讐譚を主筋として成立していたが、絵本『海のいのち』からはその要素が弱まり、太一の漁師としての生き方、海とのつきあい方へと変化してきたことであった。教材「海の命（いのち）」をその観点でしっかりととらえることが、実践において重要になる。

一度教科書に載ってしまうと、その教材を批判することが難しくなる。その教科書を用いた授業が現に行われている以上、批判が実践の妨げのようにも受け取られてしまいかねない。だからといって、不十分なものをその不十分さを了解することなく授業にかけることは、子どもたちに対しても不誠実なことである。

当面のところは、実践において「母が毎日見ている海は～」の一文をいたずらに強調することなく、「追い求めているうちに～」の前の行空きの意味を過度に扱うことのないようにすることしかないと考える。

—立松和平『一人の海』との比較をもとに—
島根大学教育学部国文学会編『国語教育論叢 第15号』2006年

注2 中野登志美 「立松和平「海の命」の教材性の検討」
広島大学大学院教育学研究科国語文化教育教育学講座『論叢 国語教育学』13号 2017年

注3 昌子佳宏 前掲論文

注4 「一人の海」の引用は、jump novel版による

注5 昌子佳宏 前掲論文

注6 平成8年度使用の光村図『国語6下 希望』では、6場面「やがて太一は村のむすめと～」は、ページが変わっており、行空きは設けられていない。

注7 光村図書『国語六下 希望』（平成7年1月検定済み 平成8年度用）

注8 渋谷孝「作者の主旨の考察と読み手のテキストの読み」
田中実・須貝千里編著『文学の力×教材の力 小学校編6年』（教育出版 2001年）

注9 昌子佳宏「教材『海の命（いのち）』論（一）—
—立松和平『一人の海』との比較をもとに—」
島根大学教育学部国文学会編『国語教育論叢 第14号』2005年

注10 中野登志美 前掲論文

注11 渋谷孝 前掲論文

注1 昌子佳宏「教材『海の命（いのち）』論（二）—

